教科書文庫
4
815
41-1931
2000033927

中學國文典

第一學年用

41835
教科書文庫
4
815
41-1931
2000033927

教科書文庫
4
815
41-1931
2000033927

文部省檢定濟
昭和六年十月九日　中學校國語漢文科用

中學國文典

第一學年用

廣島高等師範學校
附屬中學校
國語漢文研究會著

東京・大阪
京極書店藏版

広島大学図書
2000033927

資料室
375.9
H118

例言

一　本書は中學校第一學年用文法教科書として編纂したものである。

一　理論よりも實際を重んずるが故に、例文によつて歸納的に了解しうるやうにつとめ、煩雜な說明は之を避け、且練習題を特に多くした。

一　練習題は特に意を用ひ、平易を旨とし、大部分尋常小學國語讀本中から之を採つた。

一　文語文法を基礎として口語文法を說くのがすべての點に於て便利であるから、動詞・形容詞・助動詞・助詞の如き先づ文語文法を說き口語文法を之に併せ說くことにした。

一　品詞の概念を與へた後、主要な品詞の詳說に及ぶのが自然で

廣島大學圖書之印
廣島大学 教 33927

あると信ずるが故に今はそれによつた。

一　動詞は六つの活用形を知つた後、其の活用の種類を説くのが便宜であるからそれに從つた。

一　古文にのみ用ひて現代文に用ひない語法は成るべく避けることにし、記憶の便宜上特に出したものは、現代文には用ひないことを明らかにした。

昭和六年四月

著者識

中學國文典　第一學年用　目次

總說……一

前篇

第一章　名詞……二
第二章　代名詞……五
第三章　動詞……八
第四章　形容詞……一〇
第五章　副詞……一三
第六章　助動詞……一四
第七章　接續詞……一九

第八章　感動詞……二一
第九章　助詞……二三

後篇

第一章　文語動詞の活用形……二五
第二章　文語動詞の活用の種類……三〇
一　四段活用……三〇
二　上二段活用……三一
三　上一段活用……三一
四　下二段活用……三二
五　下一段活用……三三
六　カ行變格活用……三三
七　サ行變格活用……三四
八　ナ行變格活用……三五

九　ラ行變格活用……三六
第三章　文語動詞の識別法……三七
一　活用の種類を識別する法……三七
二　活用の假名遣を識別する法……三八
第四章　口語動詞の活用……四三
第五章　形容詞の活用……四八
文語形容詞……四八
口語形容詞……四九
第六章　用言の音便……五一
動詞の音便……五一
形容詞の音便……五三
第七章　文語助動詞の種類及び活用……五五
一　時の助動詞……五七

二　受身の助動詞……五八
三　可能の助動詞……五八
四　使役の助動詞……五九
五　崇敬の助動詞……六〇
六　推量の助動詞……六一
七　打消の助動詞……六三
八　指定の助動詞……六三
九　詠嘆の助動詞……六三
一〇　願望の助動詞……六四
一一　比況の助動詞……六五

第八章　口語助動詞の種類及び活用……六七

一　時の助動詞……六七
二　受身の助動詞……六八
三　可能の助動詞……六九

四　使役の助動詞……六九
五　崇敬の助動詞……六九
六　推量の助動詞……七〇
七　打消の助動詞……七一
八　指定の助動詞……七一
九　願望の助動詞……七二
一〇　比況の助動詞……七三

第九章　助詞の用法附係結の法則……七五

は・が・の……七五
を・に・へ……七六
と・も・より・まで・にて・ば……七七
とも・ど・ども……七八
つゝ・て・だに・すら・さへ……七九
のみ・ばかり・かな・ばや・な・よ・ぞ・なむ……八〇

やかこそ……八一
保結の法則……八二
第一〇章　接頭語・接尾語……八五
附錄　文法上許容に關する事項
表
一　文語動詞活用表
二　口語動詞活用表
三　文語形容詞活用表
四　口語形容詞活用表
五　文語助動詞活用表
六　口語助動詞活用表

目次終

中學國文典　第一學年用

總說

世の出來事を速に知らんとするは人情の常なり。

文

右の例のやうに、一のまとまつた思想をあらはしたものを文といふ。

單語

然して文は、これを分解する時は、右の傍線を施した部分のやうに、それぐ一の意味又は働きをもつた單位に分れる。かゝる言語の一單位を單語又は語といふ。

品詞

單語を其の意味・働き・形等の上から左の九種に分ち、その各〻を品

詞といふ。

名詞　代名詞　動詞　形容詞　副詞　助動詞　接續詞

感動詞　助詞

前篇

第一章　名詞

一　物の價の高下は、主として需要と供給との關係によるなり。

二　次郎は太郎の弟である。

右の例に於て、傍線を施した語は、事物の名稱をいふ語である。かゝる語を名詞といふ。

名詞中、左の例のやうに、事物の數量又は順序をあらはす語は、特に數詞と呼ぶことがある。

一　四と五との和は九なり。

二　鉛筆一ダースの價三十錢なり。

三　彼は級中第一番の秀才である。

練習

次の文中から名詞を選び出せ。

(1) 松江を發したる汽車は風光繪の如き宍道湖畔を走れり。

(2) 藍・白・赤の三色を以て染分けられたるは、フランスの國旗なり。

(3) 間宮林藏は幕府の命によりて、松田傳十郎と共に樺太の海岸を探檢せり。

(4) 東大寺の金堂は天空高く聳えて、五丈三尺の大佛千二百年の面影を殘せり。

(5) 麓の川を白帆が三つ四つ通つてゆく。

(6) 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた。

(7) 調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、のどかに聞えて來る。

(8) 二番目の弟は十歳で、三番目のは五歳である。

(9) 杉の梢で小鳥が一羽ないてゐる。

(10) マッチはちよつとした物で價も安く、一包十箱が十錢で買はれる。しかし一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。

(11) 父はダーウインを醫者にしようと思つて大學にやつた。

(12) ルーブル博物館も一覽しましたが、りつぱな繪畫彫刻の多いのは恐らく世界第一であらうと思ひました。又エッフェル塔にも登つて見ました。塔の高さは三百メートルもあるさうです。

代名詞
人代名詞
指示代名詞

第二章 代名詞

一 汝は彼と親友なりや。

二 これは誰の書物でせう。

三 それをあちらの机の上に置いて下さい。

右の例に於て傍線を施した語は、事物の名目の代りに用ひてこれを指示する語である。かゝる語を**代名詞**といふ。

代名詞中、人の名の代りに用ひられるものを**人代名詞**といひ、事物・場所・方向をあらはすものを**指示代名詞**といふ。

人代名詞の例

わ　われ　私　僕　小生　おれ

汝　君　貴兄　あなた　お前

か　かれ　あれ　あの方　この人

指示代名詞の例

誰　どなた　どの方
こ　この　これ　そ　その　それ
かの　あの　あれ　どの　どれ
こゝ　そこ　あそこ　いづこ　どこ
こなた　こちら　そなた　そちら
あなた　あちら　いづかた　どちら

この・その・かの・あの・どの等は、本來代名詞こ・そ・か・あ・どに助詞のが添うたものであるが、便宜上一代名詞として取扱ふ。

名詞・代名詞を**體言**といふ。

練習

一、次の文中から代名詞を選び出し、且其の種類をいへ。

(1) こはたゞ事ならず。

(2) 彼處にゆきて彼の畫師のするさまを見給へ。
(3) そはいと名殘惜しきことなり。
(4) 貴兄には此の度めでたく中學校に御入學の由御祝ひ申上候。
(5) あなたもずゐぶん大きくなりましたね。
(6) 私が今度歸つて來て、青年團の規約を見た時、其の整つてゐるのに驚いた。
(7) それなるは佐野源左衛門常世か。これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧である。
(8) どれを見ても枝といふ枝にはもう黄金色の實がなつてゐる。
(9) どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。
(10) あちらでもこちらでも、さえた鋏の音がちよきん／＼と聞える。
(11) 「あゝあれは僕の作つた曲だ。君聽き給へ。なか／＼うまいではないか。」
(12) 日が暮れた。いづこともなく淋しい野寺の鐘が聞えて來る。

二、右のほか代名詞を知つてゐるだけ擧げよ。

動詞

第三章　動　詞

一　孔子は、少時より學問に勵み、長じて後、魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、遂に魯を去りぬ。

二　宣長は眞淵の志をつぎ、努力に努力を續けて、遂に古事記の研究を大成した。

右の例に於て、傍線を施した語は、事物の動作をあらはす語である。かゝる語を動詞といふ。

一　瀨戸内海には、到る處に岬あり、灣あり。

二　棚の上に箱があり、その箱の中に手紙がある。

右のあり(ある)は事物の存在をあらはす語であるが、これも動詞である。

練習

次の文中から動詞を選び出せ。

(1) 左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。

(2) 病は口より入り、禍は口より出づ。

(3) 咲く花のにほふが如しと誇りし奈良の都も、色移り香失せて年既に久し。

(4) 沖を走るは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見える。

(5) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。

(6) 刈る切る掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働く。

(7) 宣長は常に文通して眞淵の教を受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、面會の機會は松坂の一夜以後とう〳〵來なかつた。

形容詞

第四章　形容詞

一　山高く、水深し。

二　煙たなびくとまやこそ、我がなつかしき住家なれ。

三　鶯は形はみにくいが、聲は美しい。

右の例に於て、傍線を施した語は、事物の性質又は狀態をあらはしてゐる。事物の性質又は狀態をあらはす語は他にもあるが、其の中で左の例のやうに、いひ切る場合に、文語ならばし、口語ならばい又はしいとなるものを**形容詞**といふ。

文語	**口語**
長し	長い
短し	短い

用言

悲し	悲しい
鬱陶し	鬱陶しい

動詞・形容詞を**用言**といふ。

練習

次の文中から形容詞を選び出せ。

(1) うるはしき眞玉白玉香よき木の實草の實、うづだかき積荷の中に、海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。

(2) 死は鴻毛より輕く、義は泰山より重し。

(3) 近き船は行けども遠き帆影は動かんともせず。

(4) 悔しいのか、嬉しいのか、哀しいのか、恥づかしいのか、辛いのか。

(5) 赤い花が一面に咲いて誠に美しい。

(6) 薄暗い小路を通り、小さいみすぼらしい家の前まで來ると中からピアノの音が聞える。

第五章　副　詞

一　道きはめて險しい。

二　島がかすかに見える。

三　非常に美しい森の中を、大きな河がゆるやかに流れてゐる。

右の例に於て、かすかに・ゆるやかには見える・流れといふ動詞の意味を修飾し、きはめて・非常には險しい・美しいといふ形容詞の意味を修飾してゐる。かゝる語を副詞といふ。

一　この犬は、いと速に走る。

二　彼はやゝ暫く考へてゐた。

右の例のやうに、副詞は又他の副詞の意味を修飾することもある。

かやうに副詞は、動詞・形容詞、又は他の副詞の意味を修飾するものである。

練　習

一、次の文中から副詞を選び出し、その修飾してゐる語を示せ。

(1) 奈良は唯畿内の一都市として僅かに古の名殘を留むるのみ。

(2) 三月堂二月堂霞につゝまれてさながら夢の如し。

(3) 立木極めて少なかりしかば、新に植込みたる木の數實に十數萬本に及べり。

(4) たま／＼元の大軍至るに及んで、文天祥大いに敗れ遂に敵兵に捕へらる。

(5) 町はづれの川で水浴をした。水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。

(6) がらりと雨戸を繰るとさつと夜風が吹込んで燈火がちら／＼となびく。

(7) 釋迦は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて夜はほの／＼と明けそめた。其の刹那彼は迷の雲がからりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。

二、次の副詞を用ひて短文を作れ。

多分　せつせと　あたかも　よもや

第六章　助動詞

一　苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も殘らずなりぬ。

二　改めようと思へば改められる。

右の例に於て、傍線を施した語は、動詞に添うて其の意義を助け、

色々な意味をあらはしてゐる。かゝる語を**助動詞**といふ。

助動詞は主として動詞に添うて其の意義を助けるものであるが、他の品詞に添ふこともある。

名詞に添ふ場合。

一　楠正成は忠臣なり。

二　男子としての本分だ。

代名詞に添ふ場合。

一　古今第一の忠臣は彼なり。

二　それを棄てたのは私だ。

形容詞に添ふ場合。

一　山の高きなり。

二　私が惡いのだ。

他の助動詞に添ふ場合。

一 實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

二 多分明日は來られよう。

かやうに助動詞は、動詞・名詞・代名詞・形容詞又は他の助動詞に添うて、その意義を助けるものである。

一 落花雪の如し。

二 其の速きこと汽車の走るが如し。

右の例のやうに、如しといふ助動詞は、の又はがを挾んで上に續く場合が多い。

練習

一、次の文中傍線のある語はみな文語の助動詞である。その

意味を口語でいへ。

(1) 明日は雨降らん。

(2) 彼は單身樺太におもむけり。

(3) 唯をり〳〵興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。

(4) 夜もいとふけしかば月も入りぬ。

(5) おのれは主人を迎へにとて出行きけり。

(6) 命も危かるべし。

(7) 患者に藥を飲ます。

(8) 賴朝義經に義仲を攻めさす。

(9) 旭日昇天の勢あるを思はしむ。

(10) 海まきあぐるたつまきも起らば起れ、驚かじ。

(11) もはや泣くまじ。

(12) 母は音樂を好まる。

(13) 天顔殊にうるはしく笑ませ給ふ。

(14) 神前にさゝげたしと願ひ出づる者多し。

二、次の文中から助動詞を選び出せ。

(1) それは惜しいことをした。どうかしてお目にかゝりたいものだ。

(2) 曆は實に重寶なものだ。こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないのは寶の持ちぐされだ。

(3) 物すごい響は萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。

(4) 庭に敷きつめたむしろの上に黄色い麥の穗が一面に廣げられて、まぶしい夏の日にかゞやいてゐる。

(5) 下駄の音が聞える、弟が歸つたらしい。

(6) 日本人ほどあつさりした色や味はひを好むものはあるまい。

第七章 接續詞

一 石炭・石油及び瓦斯は、現代の主なる燃料なり。

二 書を讀み、且字を習ふ。

三 友人達は昨日登山した。然し私は行かれなかつた。

右の例に於て、傍線を施した語は、その前後の語句又は文を接續してゐる。かゝる語を**接續詞**といふ。

練習

一、次の文中から接續詞を選び出せ。

(1) 吉野に遊び、ついで高野山にのぼれり。

(2) 孔子は廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達

することを得ざりき。

(3) 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人中より現れぬ。

(4) 制服にて登校すべし。但、病氣の時は此の限りにあらず。

(5) 氣候もよいし、それに交通も便利である。

(6) 彼は昨日出發しただらうか、それとも延期しただらうか。

(7) 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムかセルロイドの細いくだを附け、或は胸に袋を掛けさせて其の中に入れるのである。

(8) 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めました。

二 次の接續詞を用ひて短文を作れ。

故に　もしくは　しかれども　だが　ところが　すると

感動詞

第八章 感動詞

一 嗚呼悲しいかな。

二 あはれ、友は此の世を去りぬ。

三 おや〳〵、これは驚いた。

右の例に於て、傍線を施した語は、感動した場合に覺えず發する語である。かゝる語を**感動詞**といふ。

注意 「あな面白の樂の音や」「あゝ困つたね」のあな・あゝは感動詞であるが、や・ね等は感動の意をあらはす助詞である。即ち、感動詞は獨立した發聲の語だけをいふのである。

練習

次の文中から感動詞を選び出せ。

(1) すは勝つたるぞ。

(2) いで大船を乘出して、我は拾はん海の富。

(3) いでや目にものみせん。

(4) あはれ太閤世を去りて、世嗣の君はいとけなし。

(5) 「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」兄妹は思はず叫んだ。

(6) 兄さん、まあ何といふよい曲でせう。私にはもうとても彈けません。

(7) よう、おかあさん行つて見よう。よう。

(8) おや〳〵、まあ可愛らしい。

(9) 「やあすつかり變つた。」と聲をあげると、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつた。

(10) さあ今の間に少しも早く。

(11) おゝ降つたは〳〵。世に榮えてゐる人が眺めたら、さぞ面白い事であらう。

(12) 「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」

第九章 助詞

一 東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。

二 期限までに提出すればよいが、萬一後れると無効になる。

右の例に於て、傍線を施した語は、種々の語に添うて他の語との關係をあらはしてゐる。かゝる語を**助詞**といふ。

練習

次の文中から助詞を選び出せ。

(1) 停車場の外に出づれば、秋晴の空すみて暖さ春の如し。

(2) 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。

(3) 主人は聲を限りに呼べど、僧は聞えぬにや、ふりかへりもせず。

(4) 山にさしかゝれば舟を引きて之を越え、河湖に出づればまた舟を浮べて進む。

(5) 浪にたゞよふ氷山も、來らば來れ、恐れんや。

(6) 嬉しいにつけ悲しいにつけて憶ひ出すのは親のこと、それにポチのことだ。

(7) 寒くても我慢しろ。やがて火を焚いてやるからな。

(8) こら、どうした。命が惜しくなつたか妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、いくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有樣は何事だ。

(9) 悲しいやら淋しいやらで夜も寢られない。

(10) ふと目を覺ますと、遠くでかすかにきやん〳〵といふ聲がする。

後 篇

第一章 文語動詞の活用形

書

か……ず	む	ば	
き……て	たり	始む	
く			
く……こと	人		
け……ども	ど	ば	
け			

起

き……ず	む	ば	
き……て	たり	出づ	
く			
くる……こと	人		
くれ……ども	ど	ば	
きよ			

（射）

い……ず　む　ば
い……て　たり　切る
いる
いる……こと　人
いれ……ども　ど　ば
いよ

（蹴）

け……ず　む　ば
け……て　たり　始む
ける
ける……こと　人
けれ……ども　ど　ば
けよ

棄

て……ず　む　ば
て……て　たり　去る
つ
つる……こと　時
つれ……ども　ど　ば
てよ

（來）

こ……ず　む　ば
き……て　たり　始む
く
くる……こと　人
くれ……ども　ど　ば
こよ

（爲）

せ……ず　む　ば
し……て　たり　終る
す
する……こと　人
すれ……ども　ど　ば
せよ

有

ら……ず　む　ば
り……て　たり　がたし
り
る……こと　人
れ……ども　ど　ば
れ

死

な……ず　む　ば
に……て　たり　絶ゆ
ぬ
ぬる……こと　人
ぬれ……ども　ど　ば
ね

活用　**語根**　**語尾**　**活用形**　**未然形**　**連用形**

右の例に於て見るやうに、

一　大部分の動詞には、變化する部分と變化しない部分とある。

二　動詞の變化は、五十音圖の同行の間に於て起る。

三　動詞は六段に變化する。

かやうに、動詞の形の變化することを**活用**といひ、變化しない部分を**語根**、變化する部分を**語尾**といふ。又動詞の活用の六段の形を**活用形**といふ。

第一段　主として助動詞ず・む、助詞ば等に續けて動作の未だ成立つてゐない意をあらはす形であるから、**未然形**といふ。

第二段　主として用言に連なる形であるから、**連用形**といふ。

一　書を讀み、字を習ふ。

終止形　**連體形**　**已然形**

二　父は畠に出で、子は山に行く。

右の例のやうに、連用形は、又文意を中止して下に續ける爲に用ひられる形である。

遊び　讀み書き　山登り

連用形は又右の例のやうに、轉じて名詞となる形である。

第三段　主として文意を終止する爲に用ひられる形であるから、**終止形**といふ。

第四段　主として體言に連なる形であるから、**連體形**といふ。

第五段　主として助詞ども・ど・ば等に續けて、動作の已に成立つてゐる意をあらはす形であるから、**已然形**といふ。

第六段　専ら命令の意をあらはす爲に用ひられる形であるか

命令形

ら、命令形といふ。

練習

次の語を活用させせよ。

叫ぶ　閉づ　釣る　得　着る　恥づ　流る　煮る　有り　來る

來　爲　積む　死ぬ　報ゆ　用ふ　居る　蹴る　告ぐ

第二章　文語動詞の活用の種類

一　四段活用

語尾／語根	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書	か	き	く	く	け	け
破	ら	り	る	る	れ	れ

四段活用

右の例のやうに五十音圖の**ア**列・**イ**列・**ウ**列・**エ**列に活用するものを四段活用といふ。

四段活用の動詞は五十音圖の**カ**（ガ）**サ**・**タ**・**ハ**（バ）・**マ**・**ラ**の行にある。

二　上二段活用

上二段活用

語尾／語根	未然	連用	終止	連體	已然	命令
起	き	き	く	くる	くれ	きよ
老	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ

右の例のやうに五十音圖の**イ**列・**ウ**列に活用し、連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふものを上二段活用といふ。

上二段活用の動詞は五十音圖の**カ**（ガ）・**タ**（ダ）・**ハ**（バ）・**マ**・**ヤ**・**ラ**の行にある。

三　上一段活用

上一段活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ

右の例のやうに五十音圖のイ列にのみ活用し、終止形と連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふものを上一段活用といふ。

上一段活用の動詞は五十音圖の**ア・カ・ナ・ハ・マ・ワ**の行にある。

四　下二段活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(得)	え	え	う	うる	うれ	えよ
聞	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ

右の例のやうに五十音圖の**ウ**列・**エ**列に活用し、連體形にる、已然

下二段活用

形にれ、命令形によが添ふものを下二段活用といふ。

下二段活用の動詞は五十音圖の各行にある。

下一段活用

五　下一段活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ

右の語は、五十音圖の**エ**列に活用し、終止形と連體形にる、已然形にれ、命令形によが添うてゐる。この活用を下一段活用といふ。

下一段活用の動詞は、蹴るといふ一語のみである。

正格活用

以上五種の活用を**正格活用**といふ。

六　カ行變格活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ

カ行變格活用

右の語は**こ・き・く・くる・くれ・こよ**と活用する。この活用をカ行變格活用といふ。

カ行變格活用の動詞は來(く)といふ一語のみである。

サ行變格活用

七　サ行變格活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ

右の語は**せ・し・す・する・すれ・せよ**と活用する。この活用をサ行變格活用といふ。

サ行變格活用の動詞は、元來すといふ一語のみであるが他の語にすが添うて、多くのサ行變格活用の動詞を作る。

例へば

勉強す　登山す　悲觀す

罰す　達す　渇す　發す

報ず　講ず　應ず　投ず

論ず　觀ず　歎ず　難ず

旅(たび)す　罪(つみ)す

全うす　辱うす　空しうす

重んず　輕んず　先んず

ナ行變格活用

八　ナ行變格活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

右の語は、**な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね**と活用する。この活用をナ行變格活用といふ。

ラ行變格活用

ナ行變格活用の動詞は死ぬの外往ぬといふ語があるが、今は餘り用ひられない。

九　ラ行變格活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
有	ら	り	り	る	れ	れ

右の語は、**ら・り・り・る・れ・れ**と活用する。この活用をラ行變格活用といふ。

ラ行變格活用の動詞は、有りの外居り・侍りといふ二語があるが、今はあまり用ひられない。

一　烈しかり……烈しくありの約まつたもの。

二　堂々たり……堂々とありの約まつたもの。

三　明瞭なり……明瞭にありの約まつたもの。

形容動詞

右のやうに、形容詞又は副詞に動詞ありが添うて、その形の約まつたものがある。意味は形容詞と同じく性質又は狀態をあらはすものであるが、形は動詞と同じであるから、これを**形容動詞**といふ。

形容動詞はラ變の動詞と見なす。

變格活用

以上四種の活用を**變格活用**といふ。

文語動詞の活用には以上九種ある。

第三章　文語動詞の識別法

一　活用の種類を識別する法

語數が少なくて、暗記するとよいもの

上一段　射る　鑄る　居(ヰ)る　著(キ)る　似る　煮る　干(ヒ)る

率ゐる　見る（顧みる・惟みる・鑑みる・試みる）

下一段　蹴る

カ變　く（來）

サ變　す（爲）他語にすの添うたもの

ナ變　死ぬ（往ぬ）

ラ變　有り（居り）（侍り）

右の外は

四段　打消のずがア列の音に添ふ。

上二段　打消のずがイ列の音に添ふ。

下二段　打消のずがエ列の音に添ふ。

二　活用の假名遣を識別する法

（イ）ア行・ハ行・ヤ行・ワ行の識別法

ア行　得……下二段

ワ行　植う　飢う　据う……下二段

居る　率ゐる……上一段

ヤ行　老ゆ　悔ゆ　報（酬）ゆ……上二段

甘ゆ　嘶ゆ　癒ゆ　怯ゆ　覺ゆ

おもほゆ　消ゆ　聞ゆ　越ゆ

肥ゆ　凍ゆ　冴ゆ　榮ゆ　聳ゆ

絶ゆ　費ゆ　潰ゆ　痿ゆ　煮ゆ

生ゆ　映ゆ　冷ゆ　殖ゆ　吼ゆ

見ゆ　見ゆ　燃ゆ　萌ゆ　悶ゆ

……下二段

右の外は、すべてハ行活用である。

（ロ）ザ行・ダ行の識別法

ザ行　1　混ず……………………下二段

　　　2　他語にすのつきたるサ變の動詞中の講ず・應ず・論ず・變ず・重んず等の類

右の外は、すべてダ行である。

練習

一、次の文中から動詞を選び出し、且其の活用の種類をいへ。

(1) 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。

(2) 船の周圍に彈丸落下して、水煙を立て、時に全く船影を蔽ふことあり。

(3) 朝疾く起きて稻田のあたりをさまよふ。

(4) 畫師は夜もすがら寢ねずして明日はかく畫がかんなど獨言してゐたり。

(5) 海の靜かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて島がくれゆく白帆の影ものどかなり。

(6) 愛すべく美しき山野は更に太古以來の歴史と結び、文學と結びて、感いよいよ深きを覺ゆ。

(7) 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば我之に居らず。

(8) エヂソンは例の如く實驗室にこもりて研究に餘念なかりしが、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて眺めゐたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

二、次の語を活用の種類に分類して活用表をつくれ。

報ゆ　押す　鑄る　受く　死ぬ　去る　蹴る　來(ク)　歷(フ)　旅行す　率ゐる

三、次の文の誤を正せ。

(1) 我が望は遂に絶へたり。
(2) 鷹は飢ゆとも穗はつまず。
(3) 教ゆるは學ぶの半ばなり。
(4) 覺へず涙を落せり。
(5) 彼の誠に感づる者多かりき。
(6) 汝我が言を用いざれば老ひて後に悔ゆることあらん。
(7) 榮ふる御代にあへる我等は幸なり。
(8) 汝自らなし得ざることは之を人に强ゆべからず。
(9) 田を植ふる女の歌遙に聞ゆ。
(10) 彼の率ひる一隊は全滅せり。

第四章　口語動詞の活用

死
- な……ない
- に……ます
- ぬ
- ぬ……人
- ね……ば
- ね

有
- ら……う、
- り……ます
- る
- る……人
- れ……ば
- れ

右の例のやうに、文語のナ變・ラ變は、口語では四段となる。

起
- き……ない
- き……ます
- きる
- きる……時
- きれ……ば
- きよ(きろ)

棄
- て……ない
- て……ます
- てる
- てる……時
- てれ……ば
- てよ(てろ)

右の例のやうに、文語の上二段は口語では上一段、文語の下二段は口語では下一段となる。

（來）
こ……ない
き……ます
くる
くる……人
くれ……ば
こい

（爲）
せ……ぬ
し……ない
し……ます
する
する……人
すれ……ば
せよ
しろ

右の例のやうに、カ變・サ變は文語と口語とでは形が異なる。其の他、文語の四段・上一段・下一段は口語に於ても同じである。即ち、口語動詞の活用は左の五種となる。

四段活用……文語の四段・ナ變・ラ變
上一段活用……文語の上二段・上一段
下一段活用……文語の下二段・下一段
カ行變格活用……終止形が文語と異なる。
サ行變格活用……終止形が文語と異なる外、地方により、未然形命令形も異なる。

練　習

一、次の文中から動詞を選び出し、且其の活用の種類をいへ。

(1) 父が木を伐れば自分は雜草を刈る、父が畠を打てば自分は種をまく。
(2) 裁判の目的は決して人を爭はせ、又は人を罰することではない。
(3) 札幌へ來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことだ。

(4) 「人は火を用ひる動物。」といふやうに、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない。

(5) 東の空が明るくなると、今まで軍港の闇に包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だん〳〵にあらはれて來る。

(6) 鷄が麥のこぼれたのを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

(7) ひぐらし蟬の聲が聞え始めると、暑さがどんなにはげしくても、妙に秋らしい氣がする。

(8) 昔の武士はたとひ飢ゑて死ぬとも二君に仕へることを恥ぢた。

(9) 富士山へ登るのは苦しからうが、また中々面白からう。

(10) さや〳〵搖れる葉蔭では露の散るのがうれしいか、ころ〳〵と虫が鳴く。

二、次の文中○のところに適當な假名を入れよ。

(1) 急に天が曇つて來て星影一つさへ見○ない。

(2) 月の冴○た冬の夜友人と二人町へ散歩に出た。

(3) 大砲を鑄て砲臺に据○る。

(4) 人に物を與○ることは樂しい。

(5) 問ふことを恥○るものは立派な人にはなれない。

(6) 老○ては子に從へ。

(7) 庭園に花を植○て樂しむ。

(8) 彼の率○る一隊は敵の右側に出た。

(9) 私も隨分老○たが、しかしこのまゝ朽ちはてようとは思○ない。

(10) 月が霜のやうに冴○、木枯が海のやうに吼○る夜は、物音がすべて絶○て、何ともい○ぬ物凄さを感○る。

三、動詞の文語口語の活用の比較表を作れ。

第五章　形容詞の活用

文語形容詞

高
- く……ば　とも
- く……て　聳ゆ
- し
- き……こと　山
- けれ……ども　ば

美
- しく……ば　とも
- しく……て　咲く
- し
- しき……こと　花
- しけれ……ども　ば

右の例に於て見るやうに、形容詞は

一　カ行・サ行の兩行に跨つて活用する。

二　命令形はない。

三　左の二通りの活用がある。

ク活用
シク活用

語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然
高	く	く	し	き	けれ
美	しく	しく	し	しき	しけれ

前者を**ク活用**といひ、後者を**シク活用**といふ。

口語形容詞

高
- ○
- く(う)……聳える　ない
- い
- い……こと　山
- けれ……ば

美
- ○
- しく(う)……咲く　ない
- しい
- しい……こと　花
- しけれ……ば

右の例に於て見るやうに、口語形容詞の活用には未然形がない。

副詞形

形容詞の連用形は、副詞の用をなす場合が多いので、これを**副詞形**ともいふ。

一　水清く流る。

二　花があはたゞしく散つてしまつた。

種類	語根＼語尾	未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	高		く（う）	い	い	けれ
シク活用	美		しく（しう）	しい	しい	しけれ

練習

一、次の文中から形容詞を選び出し、且其の活用の種類をいへ。

(1) 松青く樓門赤く、茶煙絶え〴〵にあがりて、花極めて白し。

(2) 枇杷はうまけれど種子大きく肉少なきは飽かぬ心地す。

(3) 朝夕は凌ぎやすけれど日中は堪へ難し。

(4) 多くの動物を注意して見ると、いろ〳〵珍しい事があるのに氣がつく。

(5) だら〳〵坂を登りきると道は低い峯傳ひになる。何時もは薄暗い程茂り合つてゐる兩側の木立も、まだ若葉だけに下草まで見えるぐらゐ明るい。

(6) 寶玉をちりばめたやうなかはいゝ目、紅をさしたかと思はれるやさしいいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。

二、次の形容詞を活用させよ。

なし　するどし　羨し　樂しい　勇しい

第六章　用言の音便

音便

動詞の音便

或語が他の語に續く場合、發音の便宜上その音が變化することがある。これを**音便**といふ。　動詞の音便はその連用形からて

イ音便　ウ音便　撥音便

(て)・た(だ)・たり(だり)に續く場合に起る。

一　イ音便　き・ぎがいに轉ずる場合

- 咲き → 咲いて　咲いた　咲いたり
- 泳ぎ → 泳いで　泳いだ　泳いだり

二　ウ音便　ひがうに轉ずる場合

- 買ひ → 買うて　買うた　買うたり

三　撥音便　に・び・みが撥音のんに轉ずる場合

- 死に → 死んで　死んだ　死んだり
- 飛び → 飛んで　飛んだ　飛んだり
- 怨み → 怨んで　怨んだ　怨んだり

促音便

四　促音便　き・ち・ひ・りが促音のつに轉ずる場合

- 行き → 行つて　行つた　行つたり
- 勝ち → 勝つて　勝つた　勝つたり
- 買ひ → 買つて　買つた　買つたり
- 賣り → 賣つて　賣つた　賣つたり

右の中て(で)に續く場合には文語・口語共に用ひ、た(だ)・たり(だり)に續く場合は口語にのみ用ひる。

形容詞の音便

一　イ音便　文語形容詞の連體形がいとなる場合

難きかな…………難いかな。
美しきかな…………美しいかな。

二 ウ音便 文語形容詞の連用形がうとなる場合

山高くして……山高うして。

若くして死す……若うして死す。

練習

一、次の文中の音便を示し、且其の種類をいへ。

(1) 救はんとすれど悲しいかな我が力及ばず。

(2) 誓うて艱難に堪へ初志を貫くべし。

(3) 勝つて兜の緒をしめよ。

(4) 山高うして水清く、松青うして沙白し。

(5) 飛んで火に入る夏の虫。

(6) 日はもう西に傾いてゐる。ふと見あげると、庭の柿の木にはすゞなりになつた實が夕日をあびて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。

二、次の文の誤を正し、且其の理由をいへ。

(1) 久しふあはざりし友に會ひて語るは樂しきことなり。

(2) 天を仰ひで嘆息せり。

(3) 此の道に沿ふてゆけば海岸に出る。

(4) 風呂敷包を背負つた背中が汗ばむで來る。

(5) 一寸新聞を讀むでからゆくよ。

(6) お見送りを辱ふし有りがたふ御座いました。

第七章 文語助動詞の種類及び活用

一 時の助動詞

(イ) 完了の助動詞 つ・ぬ・たり・り

過去

花咲き……つ。
……ぬ。
花咲け……り。
……たり。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
り			り	る	れ	

(ロ)　**過去の助動詞　き・けり**

花散り……き。
……けり。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き			き	し	しか	
けり			けり	ける	けれ	

未來

(ハ)　**未來の助動詞　む**

明日は雨晴れ……む。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む			む	む	め	

未來の助動詞むは同時に推量の意をあらはし、又意志をあらはすに用ひる場合もある。

明日は彼も行かむ。(推量)
明日は我も行かむ。(意志)

むは文章中に於ては、んと書く場合が多い。

二　受身の助動詞　る・らる

犬、人に打た…る。
賊、捕へ…らる。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ

三　可能の助動詞　る・らる・べし・べかり

此の書は、我にも讀ま…る。
何人にも了解せ…らる。
此の山は、容易に登る…べし。
危險にして、近づく…べから…ず。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
べかり	べから	べかり				

る・らるの活用は受身の場合と同じい。但、命令形がない。

四　使役の助動詞　す・さす・しむ

下女に水を汲ま…す。
犬を子供に馴れ…さす。
賴朝、義經をして、義仲を攻め…しむ。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

五　崇敬の助動詞　る・らる・す・さす・しむ

父、東京に行か…る。

先生は、本日缺席せ…らる。

殿下、臨幸あら…せ…らる。

皇后陛下、日光に行啓せ…させ…給ふ。

天皇陛下には、親しく觀兵式に、臨ま…しめ…給ふ。

る・らるは受身、す・さす・しむは使役の場合と活用が同じい。す・さす・しむは右の例のやうに、下にらる・給ふ等の添ふ場合が多い。

崇敬の意をあらはすには、右のやうな助動詞の外に、給ふ・おはす・おはします・ます・まします・奉る・候といふやうな動詞が轉じて用ひられる場合がある。

六　推量の助動詞　らむ・べし・けむ

雨降る……らむ。

……べし。

雨降り……けむ。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らむ			らむ	らむ	らめ	
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
けむ			けむ	けむ	けめ	

けむは、過去の推量である。

べしは、可能・推量の意をあらはす外に、命令・義務の意をあらはすことがある。

汝速に行くべし。（命令）

軍人は上官に服從すべきなり。（義務）

右の外古くはらし・まし・めりといふ助動詞が用ひられたが、今は餘り用ひられない。

七　打消の助動詞　ず・ざり・じ・まじ

風吹か…ず。

…ざり……き。

…じ。

風吹く…まじ。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり		ざる	ざれ	ざれ
じ			じ	じ	じ	
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	

じ・まじは打消の推量である。

八　指定の助動詞　なり・たり

月出づる……なり。

孔子は聖人…なり。

君君…たり、臣臣…たり。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

九　詠嘆の助動詞　なり・けり

蟲の聲す…なり。

悲しきものは、我が身なり…けり。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり			なり	なる	なれ	
けり			けり	ける	けれ	

指定のなりは體言及び全動詞の連體形に續き、咏歎のなりはラ變の連體形、其の他の動詞の終止形に續く。

願望の助動詞

一〇　願望の助動詞　たし・まほし

飛行機に乘り…たし。

月見に行か…まほし。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	

比況の助動詞

一一　比況の助動詞　如し

落花雪の…如し。

雷の落つる(が)…如し。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
如し	如く	如く	如し	如き		

右のやうに、助動詞には、(一)動詞に似た活用をなすもの、(二)形容詞に似た活用をなすもの、(三)獨特の活用をなすものがある。

練習

次の文中から助動詞を選び出し、且其の種類及び活用をいへ。

(1) 過ぎたるはなほ及ばざるが如し。

(2) ことはたゞ事ならじと本營に急報すれば、将軍直に物見の兵を出してうかゞ

はしむ。

(3) 千木のほとりを飛べる鳩のさながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。

(4) 主上はや院庄に入らせ給ふ。

(5) なぎさに立ちて昔を偲べば、そのかみ此處にいかめしく向ひあひけむ英雄の姿、今まのあたり見るが如し。

(6) いづかたに志してか日盛りのやけたる道を蟻の行くらむ。

(7) 花は櫻木の諺自ら思ひ出でらる。

(8) 氣の毒とや思ひけん、僧をば待たせおき外に出行きけり。

(9) 「先生の墓所は畑道なれば知れ申すまじ、案内し參らせん。」とて導き行きけり。

(10) さし昇る朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり。

時の助動詞

過　去

第八章　口語助動詞の種類及び活用

一　時の助動詞

(イ) 過去の助動詞　た(だ)

朝早く起き…た。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
た	たら	たり	た	た	たれ	

たはだとなることがある。

風が凪いだ。

高く飛んだ。

(ロ) 口語では過去と完了との區別がない。

未來

受身の助動詞

（ロ）**未來の助動詞　う・よう**

明日は雨が降ら…う。

明日は晴れ…よう。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
う			う			
よう			よう			

二　受身の助動詞　れる・られる

主人に叱ら…れる。

主人に譽め…られる。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

可能の助動詞

使役の助動詞

崇敬の助動詞

三　可能の助動詞　れる・られる

誰でも行か…れる。

誰にでも覺え…られる。

活用は受身の場合と同じい。但、命令形はない。

四　使役の助動詞　せる・させる

生徒に字を書か…せる。

子供に惡戲をやめ…させる。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

五　崇敬の助動詞　れる・られる・ます

兄上が種を蒔か…れる。

父上が木を植ゑ…られる。

草取は私がし…ます。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

れる・られるの活用は、受身の場合と同じい。

右の外、せられる・させられる・あそばす・なさる・いたします・まうします等の合成語が用ひられる。これ等は便宜上一の助動詞として取扱つてよい。

六　推量の助動詞　らしい

彼は、もう知つてゐる…らしい。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らしい		らしく（らしう）	らしい	らしい		

右の外、であらう、だらう等の合成語が用ひられる。

七　打消の助動詞　ぬ・ない・まい

私は知ら…ぬ。（ん）

…ない。

彼も知る…まい。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ぬ		ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね	
ない		なく	ない	ない	なけれ	
まい			まい			

八　指定の助動詞　だ・です

彼は僕の親友…だ。

これは私の本…です。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
だ			だ			
です	でせ	でし	です			

だ・ですが活用語の下に添ふ時にはのだ・のですとなる。

私は勉強するのだ。

あの山は隨分高いのだ。

そんな事はないのです。

右の外、であるといふ合成語が多く用ひられる。

九　願望の助動詞　たい

首尾よく及第し…たい。

語＼活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たい		たく（たう）	たい	たい	たけれ	

一〇　比況の助動詞　やうだ・やうであるといふ合成語が用ひられる。

落花が雪の…やうだ。

銀の砂を撒いた…やうである。

詠嘆の意は助詞ねえ（なあ）等を添へてあらはし、別に助動詞はない。

練習

次の文中から助動詞を選び出し、且其の種類をいへ。

(1) 老人は大分疲れたやうである。少年は鐵瓶の湯をついで老人にすゝめた。

(2) 世界一といはれるナイヤガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。

(3) もう人にはたよるまい。自分一人で修行しよう。
(4) 腹が大分すいて來ました。もうお晝頃でせうね。
(5) 來客があるらしいから今は行くのをやめにしよう。
(6) 電氣は今やあらゆる方面に利用されてゐる。
(7) 先生にもほめられ、家でもほめられ、この上なく喜んだ。
(8) お庭も拜見したければ、お話も伺ひたい。
(9) 其の壯觀はとても筆や口では盡くされません。
(10) 老僧の終始一貫した根氣は遂に村の人々を恥ぢさせたものか仕事を助ける者がまたぼつ〳〵出來て來た。
(11) これだけお待ちあそばせばこの上はお歸りになつてもよろしうございませう。

第九章　助詞の用法附係結の法則

助詞は左の用例に於て見るやうに、種々の語に添うて種々の意をあらはすものであつて、文語と口語と用法の同じものもあり、又異なるものもある。

	(文語)	(口語)
は	富士は日本一の名山なり。	富士は日本一の名山である。
が	汝が知る處にあらず。	お前が知つたことではない。
	梅が香のあたりたゞよふ。	梅の香があたりにたゞよふ。
	努力せしが、かひなかりき。	努力したが、かひがなかつた。
	水の流るゝが如し。	水が流れるやうだ。
の	秋風の立つ。	秋風が立つ。

の　櫻の花咲出でたり。
　　光陰矢の如し。
を　山を下る。
　　かくまで努力せしものを。
に　東京に行く。
　　努力せしに、かひなかりき。
へ　彼方へ行く。

櫻の花が咲いた。
光陰は矢のやうだ。
山を下る。
これ程努力したのに。
東京に行く。
東京へ行く。
努力したのに、かひがなかつた。
あちらへ行く。
あちらに行く。

右の例に於て見るやうに、文語ではには場所を、へは方向を示す場合に用ひられるが、口語では混同して用ひられる。

と　次郎といふ子あり。
　　友人と散歩す。
　　智と勇とを兼ぬ。
も　野も山も花盛りなり。
　　勉強したるも、落第せり。
より　隣國より來る。
　　金は銀より貴し。
まで　大阪まで同行すべし。
にて　ペンにて書く。
ば　雨降らば、行くまじ。
　　雨降れば、行かず。

次郎といふ子がある。
友人と散歩する。
智と勇とを兼ねてゐる。
野も山も花盛りである。
勉強したけれども、落第した。
隣國から來た。
金は銀より貴い。
大阪まで同行しよう。
ペンで書く。
雨が降れば、行くまい。
雨が降るから、行かない。
雨が降るので、行かない。

右の例に於て見るやうに、文語ではばが活用語の未然形につけば假定の條件をあらはし、已然形につけば既定の條件をあらはす。然るに、口語ではばが已然形について假定の條件をあらはし、既定の條件をあらはすには別にから・ので等を用ひる。

とも	行くとも及ばじ。	行つても間にあふまい。
	死すとも背かじ。	死んでも背くまい。
ど	風強けれど舟ゆれず。	風が強いけれど舟はゆれない。 風が強いけれども舟はゆれない。 風が強いが、舟はゆれない。
ども	吹けども消えず。	吹くけれど消えない。 吹くけれども、消えない。 吹くが、消えない。
つゝ	涙を流しつゝ語る。	涙を流しながら語る。
て	我も行きて見ん。	私も行つて見よう。
だに	禽獸にだに若かず。	禽獸にさへ及ばない。
すら	禽獸すら恩を知る。	禽獸さへ恩を知つてゐる。
さへ	道險しく、雨さへ降る。	道が險しく、雨さへ降る。 道が險しく、雨までが降る。

右の例に於て見るやうに、文語ではだにすらは輕いものを擧げて重いものを言外に含め、さへはあるが上に更に加はる意をあらはしてゐるが、口語ではさへが何れにも用ひられる。

のみ　親の事のみ思ふ。

ばかり　かくばかり善きはあらじ。

かな　朗かなる月かな。

ばや　我も行かばや。

な　急ぎて過すな。

よ　その悲しさよ。
風よ、吹け〳〵。

ぞ　我も人ぞ。
○彼ぞその人なる。

なむ　世の汚をば知らであらなむ。
○彼なむ知れる。

や　あな勇ましや。
豈我のみならんや。
果して其の人なりや。
○花や散りし。

か　如何にすべきか。
○誰にか與ふべき。
○誰かこれを知らざる。

こそ　○よくこそ來給ひつれ。

親の事ばかり思ふ。
これほど善いのはあるまい。
朗かな月だねえ。(なあ)
私も行きたいねえ(なあ)
急いで過するな。
その悲しいことよ。
風よ、吹け〳〵。
俺も人間だぞ。
彼がその人なのだ。
世の汚は知らないでゐたいものだ。
彼が知つてゐるのだ。
あゝ、勇ましいねえ。(なあ)
どうして自分だけであらうか。
果して其の人であらうか。
花は散つたらうか。
どうしたらよからうか。
誰に與へたらよからうか。
誰がこれを知らないであらうか。
ようこそお出でになりました。

係結の法則

右の〇印を附した例に於て見るやうに、文語に於てぞ・なむ・や・か が文の途中に來る時は、それに應ずる結びは連體形となり、こそが文の途中に來る時は、それに應ずる結びは已然形となる。此の法則を**係結の法則**といふ。

但、その文が接續の助詞によつて下に續けられる場合は、係結の法則は消えて、その助詞の接續の法則に從ふ。

なさけある人とぞ聞ゆれ（る）ば、……

時鳥一聲とこそ思ひし（しか）に、……

練習

一、次の文中から助詞を選び出せ。

(1) 君に知らせ奉らばや。

(2) 繪にかくとも筆も及ぶまじ。

(3) 古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと。

(4) 波風の靜かなる日も舟人はかぢに心を許さざらなむ。

(5) 淺綠すみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな。

(6) 打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。

(7) 水の中は冷いけれども、上るとなほ寒い。

(8) 泣いても笑つても、もはや仕方がない。

(9) 隨分勉强したのに合格出來なかつた。

(10) 空には星ばかりきらめいてゐる。

二、次の文の係結について述べよ。

(1) 君をおきてはた誰をか頼むべき。

(2) 煙たなびくとまやこそわがなつかしき住家なれ。

(3) 綠なる一つ草とぞ春は見し、秋はいろ〳〵の花にぞありける。

(4) ほど〳〵に心を盡くす國民の力ぞやがてわが力なる。

三、次の文中○のところに適當な語を補へ。

(1) 明日は天氣惡しく○○出發せん。
(2) 暗き○早や起出づる人あり。
(3) かゝる行は學生のす○○○ことなり。
(4) 此の品物に手を觸○べからず。
(5) 思ひもかけぬに東京の友○來れる。
(6) 花の中にて櫻こそめでたきもの○○。
(7) 行末のことを思へば○○やかましくいつたのだ。
(8) 雨が降るのに風○○吹く。
(9) その位のことは誰に○○出來る。
(10) いたづらする○○叱られるのだ。
(11) 金をためる○○○で使はぬ。

第一〇章　接頭語・接尾語

接頭語

單獨には用をなさないで、他の語の上について熟語をなす語を接頭語といふ。

うひ陣　お庭　す足　ひが目　ま心　を田
た走る　ほの見ゆ　いや增す　さ迷ふ　か弱し
け高し　なまやさし　もの寂し　た易し

又

うち出づ　さし出す　ひき受く

右のうち・さし・ひき等は本來動詞であるが、その本の意を失つて接頭語となつたものである。

接尾語

單獨には用をなさないで、他の語の下について熟語をなす語を接尾語といふ。

子ども　彼ら　君たち　奴ばら　君がた
長さ　嬉しさ　厚み　重げ
春めく　黄ばむ　嬉しがる　上品ぶる
露けし　男らし　馬鹿らし
夜すがら　花見がてら　少しづつ

練習

一、次の文を品詞に分けよ。

(1) 生物の聲全く絶えて、たゞ我が砂を踏む足音のみ高く響く

(2) 京鎌倉ではそろ〳〵櫻の咲かうといふ三月の初めであるのに、北風荒き北海の孤島ではちら〳〵雪が降る。

(3) りん〳〵といふ冴えた音が、山裾からこの山荘にまで聞える。　お遍路さんが振る鈴の音なのだ。

二、次の文中から活用する品詞を選び出し、且其の活用をいへ。

(1) よきをとりあしきをすててとつ國に劣らぬ國となすよしもがな。

(2) 花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を觀る客、清水觀音の堂前に滿ちたり。　舞臺の上より見下す人舞臺の下より咲誇る花恰も一幅の畫の如し。

三、次の語の讀假名をつけよ。

鑄　射　堪　報　用　榮　植　据　致　衰　恥　越　率　居

中學國文典 第一學年用 終

附錄　文法上許容に關する事項

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ従フモ妨ナシ。

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ

五、「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「、、セラル」トイフベキ場合ニ「、、サル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　罪サル
　　評サル
　　解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
　　上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
　　攻撃開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例　花ヲ見ルノ記
　　學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
　　市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例　有ルヤ
　　面白キヤ
　　父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

一一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　數百年ヲ經ルトモ
　　如何ニ批評セラルルトモ
　　强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

一二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及ビ、時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ

嘲弄セラルルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其ノ德ヲ稱ヘケルトゾ

一三、語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書㊦ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳㊦ヲ讀ムベシ

一四、上ニ疑ノ語アルトキハ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

一五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニオイテ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等ノ事由アルモ（アリトモ）議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ（タレドモ）準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ（シカドモ）昨日ヨリ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ（スルトモ／スレドモ）之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ（クトモ／ケレドモ）應募者ハ多カルベシ

一六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例　イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

口語動詞活用

種類	四段			上一段		
語根／語尾	書	死	有	起	（射）	棄
未然	か	な	ら	き	い	て
連用	き	に	り	き	い	て
終止	く	ぬ	る	きる	いる	てる
連體	く	ぬ	る	きる	いる	てる
已然	け	ね	れ	きれ	いれ	てれ
命令	け	ね	れ	き（きろ）よ	い（いろ）よ	て（…）よ
文語ニテハ	四段	ナ變	ラ變	上二段	上一段	下二段

文語動詞活用表

種類	四段	上二段	上一段	下二段	下一段	カ變	サ變	ナ變	ラ變
語根／語尾	書	起	（射）	棄	（蹴）	（來）	（爲）	死	有
未然	か	き	い	て	け	こ	せ	な	ら
連用	き	き	い	て	け	き	し	に	り
終止	く	く	いる	つ	ける	く	す	ぬ	り
連體	く	くる	いる	つる	ける	くる	する	ぬる	る
已然	け	くれ	いれ	つれ	けれ	くれ	すれ	ぬれ	れ
命令	け	きよ	いよ	てよ	けよ	こよ	せよ	ね	れ

口語形容詞活用表

種類	ク活用	シク活用
語根／語尾	高	美
未然		
連用	く（う）	しく（しう）
終止	い	しい
連體	い	しい
已然	けれ	しけれ
命令		

文語形容詞活用表

種類	ク活用	シク活用
語根／語尾	高	美
未然	く	しく
連用	く	しく
終止	し	し
連體	き	しき
已然	けれ	しけれ
命令		

口語動詞活用表

種類	四段			上一段		下一段		カ變	サ變
語根／語尾	書	死	有	起	（射）	棄	（蹴）	（來）	（爲）
未然	か	な	ら	き	い	て	け	こ	せ し
連用	き	に	り	き	い	て	け	き	し
終止	く	ぬ	る	きる	いる	てる	ける	くる	する
連體	く	ぬ	る	きる	いる	てる	ける	くる	する
已然	け	ね	れ	きれ	いれ	てれ	けれ	くれ	すれ
命令	け	ね	れ	きよ（きろ）	いよ（いろ）	てよ（てろ）	けよ（けろ）	こい	せよ しろ
文語ニテハ	四段	ナ變	ラ變	上二段	上一段	下二段	下一段	カ變	サ變

活用表

種類	下一段	カ變	サ變	ナ變	ラ變
語根／語尾	（蹴）	（來）	（爲）	死	有
未然	け	こ	せ	な	ら
連用	け	き	し	に	り
終止	ける	く	す	ぬ	り
連體	ける	くる	する	ぬる	る
已然	けれ	くれ	すれ	ぬれ	れ
命令	けよ	こよ	せよ	ね	れ

助動

	使役（崇敬）	
べかり	す	さす
べから	せ	させ
べかり	せ	させ
	す	さす
	する	さする
	すれ	さすれ
	せよ	させよ

文語助動詞活用表

種類		語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
時	完了	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
		ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
		たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
		り			り	る	れ	
	過去	き			き	し	しか	
		けり			けり	ける	けれ	
	未來	む			む	む	め	
受身（崇敬）		る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
		らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
可能		る	れ	れ	る	るる	るれ	
		らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	
		べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
		べかり	べから	べかり				
使役（崇敬）		す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
		さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
		しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
推量		らむ			らむ	らむ	らめ	
		べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
		けむ			けむ	けむ	けめ	
		ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
		ざり	ざら	ざり		ざる	ざれ	ざれ

文語助動詞活用表

種類		語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
時	完了	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
		ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
		たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
		り			り	る	れ	
	過去	き			き	し	しか	
		けり			けり	ける	けれ	
	未來	む			む	む	め	
受身（崇敬）		る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
		らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
可能		る	れ	れ	る	るる	るれ	
		らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	
		べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
		べかり	べから	べかり				
使役（崇敬）		す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
		さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
		しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
推量		らむ			らむ	らむ	らめ	
		べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
		けむ			けむ	けむ	けめ	
打消		ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
		ざり	ざら	ざり		ざる	ざれ	ざれ
		じ			じ	じ	じ	
		まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	
指定		なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
		たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
詠嘆		なり			なり	なる	なれ	
		けり			けり	ける	けれ	
願望		たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
		まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	
比況		如し	如く	如く	如し	如き		

用表

推量	打消			指定		願望
らしい	ぬ	ない	まい	だ	です	たい
					でせ	
(らしう)	ず	なく			でし	たく(たう)
らしい	ぬ(ん)	ない	まい	だ	です	たい
らしい	ぬ(ん)	ない				たい
	ね	なけれ				たけれ

口語助動詞活用表

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
時・過去	た	たら	たり	た	た	たれ	
時・未來	う			う			
時・未來	よう			よう			
受身（尊敬）	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
受身（尊敬）	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ
可能	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	
可能	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	
使役	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
使役	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ
尊敬	ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ
推量	らしい		らしく（らしう）	らしい	らしい		
打消	ぬ		ず	ぬ（ん）	ぬ（ん）	ね	
打消	ない		なく	ない	ない	なけれ	
打消	まい			まい			
指定	だ			だ			
指定	です	でせ	でし	です			
願望	たい		たく（たう）	たい	たい	たけれ	

文部省檢定濟

昭和六年十月九日　中學校國語漢文科用

昭和六年四月二十日印刷
昭和六年四月二十五日發行
昭和六年十月二日訂正再版印刷
昭和六年十月五日訂正再版發行

【中學國文典】（第一學年用）

定價金四拾參錢

著作權所有

著作者　廣島高等師範學校附屬中學校　國語漢文研究會

發行者兼印刷者　大阪市西區立賣堀南通三丁目二十一番地　京極喜太郎

發行所　東京市赤坂區新坂町六十八番地　大阪市西區立賣堀南通三丁目　振替口座大阪八六〇四五番　京極書店

發賣所　大阪市東區北久太郎町四丁目　柳原書店

發賣所　東京市日本橋區數寄屋町七番地　林六合館

70-

広島大学図書
2000033927